2．成果・実績等について（鹿児島大学トピックス）

1．大学運営関係

（1）「THEｲﾝﾊﾟｸﾄﾗﾝｷﾝｸﾞ2024」総合ﾗﾝｷﾝｸﾞ国内18位、SDG17国内３位ﾀｲ獲得

2024年6月12日、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education（THE：ティー・エイチ・イー）」が「THEインパクトランキング2024」を発表しました。鹿児島大学は昨年に続いてSDG2、SDG3、SDG9、SDG14、SDG15、SDG17の6つの目標にエントリーし、総合ランキングで401-600位（国内18位タイ）にランクインしました。

特に、SDG別ランキングSDG17〈パートナーシップで目標を達成しよう〉では昨年に続き国内３位タイという高い評価を得ました。また、SDG15〈陸の豊かさも守ろう〉で国内5位タイ、SDG2〈飢餓をゼロに〉とSDG14〈海の豊かさを守ろう〉でも国内8位タイという高い評価を得ました。

THEインパクトランキングとはイギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education（THE）」が大学の社会貢献の取組をSDGsの枠組みを通して可視化するランキングで2019年から行われています。参加大学は毎年増加しており、6回目である今回は世界1963大学（前回1591大学）、国内74大学（前回78大学）がランクインしています。

今後も鹿児島大学は教育や研究を通じ、「オール鹿大」でSDGs達成の推進に取り組み、持続可能な社会の実現に貢献します。

（関連）
・THE Impact Rankings 2024
（Times Higher Educationホームページ）

・鹿児島大学× SDGs

大学HP記事

2．社会貢献・社会連携関係

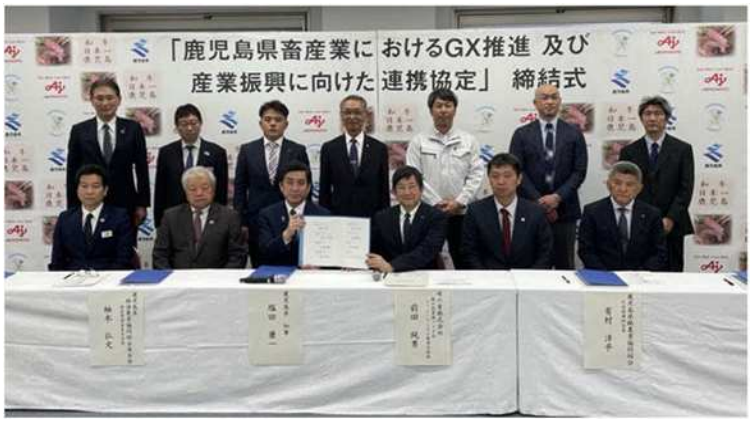
（1）鹿児島県畜産業におけるGX推進及び産業振興に向けた連携協定を締結

令和6年4月2日、鹿児島大学共同獣医学部は、鹿児島県、味の素株式会社、県内畜産関係団体・事業者（8機関）、金融機関（2機関）と「鹿児島県畜産業におけるGX推進及び産業振興に向けた連携協定」を締結しました。

本協定は、栄養吸収率を高める飼料用アミノ酸を活用して、牛から排出される温室効果ガスの削減及び生産コストの低減・生産性の向上を図ることにより、鹿児島県畜産業におけるＧＸを推進するとともに、同産業の振興を図ることを目的としたもので、飼料用アミノ酸の給与試験の実施、試験結果の共有・発表及び普及促進、鹿児島県産牛肉・生乳等の付加価値向上による鹿児島県畜産業の振興等に取り組むものです。

鹿児島県庁で行われた締結式では、趣旨説明、各機関の代表者による協定書への署名に続き、塩田康一鹿児島県知事及び各機関代表者から挨拶があり、遠藤泰之共同獣医学部長からは「本協定に参画できることを非常に光栄に思う。本学部には畜産学に関するエキスパートが多数在籍しており、試験の実施や結果の検証等の学術的なサポートで貢献していきたい」との意気込みが語られました。

今後、各機関がそれぞれの強みを活かし緊密に連携することにより、本県における畜産業のGX及び産業振興が推進されることが期待されます。



大学HP記事

（２）鹿児島大学 防災シンポジウム「桜島の火山防災と地域コミュニティ―『桜島火山爆発総合防災訓練』学生発表から考える―」を開催

8月9日に鹿児島市桜島公民館大研修室において、鹿児島大学防災シンポジウム「桜島の火山防災と地域コミュニティ―『桜島火山爆発総合防災訓練』学生発表から考える―」（主催：国立大学法人鹿児島大学、共催：鹿児島市、桜島地域コミュニティ協議会連絡会）を開催しました。

前日８日夕方にM7.1、最大震度６弱の「日向灘の地震活動」があり、防災機関関係者の参加が少なくなったものの、大規模噴火時の避難行動の主体となる桜島住民を中心に、鹿児島市や鹿屋市等の自治体関係者、教育研究関係者、学生等、計87名が参加しました。

シンポジウムでは、大規模噴火時の避難行動の主体となる桜島住民を中心に、鹿児島市等、自治体の防災担当者、防災関係機関関係者等が一つの場に集い、学生発表で提示されたデータ（根拠）に基づき、桜島大噴火時の住民対応をさまざまな観点から考察して、共通認識を得られたことが、大事な成果として注目できます。

特に、Ⓐ鹿児島市で近年改善されてきた「桜島大噴火時の住民避難計画」についての桜島住民への周知が不十分であること、そのためには、Ⓑ桜島住民個人・コミュニティの実態に基づき、丁寧なリスク・コミュニケーションが必要なこと、©住民避難計画において緊急安全確保時の対策が欠如していること等が明確にされました。

そして、今後も、鹿児島大学では、桜島のコミュニティおよび住民等「逃げる人の実態」を重視するというアプローチで、桜島大噴火時の住民避難計画の改善やその後の避難生活の事前準備計画の立案に貢献し、関係団体と連携して、シンポジウムあるいはワークショップを今後も実施して、桜島住民とのリスク・コミュニケーションを行っていくことが確認されました。

大学HP記事

（３）奄美自然プログラムを実施～県内外小中学生が奄美大島固有の自然を体験～

８月19日から21日にかけて「奄美自然体験プログラム」を実施しました。同プログラムは、児童・生徒の自主的な学びと課題解決能力の向上を図るとともに、科学への興味をもってもらうことを目的としたもので、県内外の小学4年生から中学2年生とその保護者17人が参加しました。♂　参加者は、期間中、奄美の亜熱帯多雨林やマングローブ林、磯、干潟のフィールドにおいて、鹿児島大学の総合研究博物館、国際島嶼教育研究センター、教育学部、理学部及び水産学部の研究者や学生ボランティアから説明を受けながら、奄美の植物、生物や自然について観察しました。参加者からは「生き物好きな子供ですが、森を散策して先生とお話をする事で植物や樹木へも興味が大きく広がる3日間だった」「どのプログラムも、とても興味深く本当に素晴らしい経験をさせて頂く事ができた」といった感想が聞かれ、世界自然遺産の奄美大島固有の多様な自然を体感することで科学への興味を大いに深める機会となりました。

大学HP記事

（４）2024鹿児島大学奄美群島拠点シンポジウム －奄美群島の「地域活性化の中核的拠点」をめざして―を奄美市で開催

令和６年10月11日、12日に奄美市のアマホームPLAZA（奄美市市民交流センター）マチナカホールとオンラインのハイブリッドにより2024鹿児島大学奄美群島拠点シンポジウム－奄美群島の「地域活性化の中核的拠点」をめざして―を開催しました。

本シンポジウムは、奄美群島内の自治体や企業等と連携して実施してきた本学の研究、地域課題解決及び教育・人財育成の取組を紹介し、奄美群島の地域活性化について討議することを目的としており、両日で一般、自治体・企業・学校・団体等の職員、高校生など対面延べ154名、オンライン延べ167名が参加しました。

プログラム1日目は「奄美群島における学術研究の推進と産学官金連携の推進」をテーマに本学研究者、民間企業、団体等の5名の方からそれぞれの分野の講演が行われました。引き続き「産学官金連携でめざす奄美群島の未来」と題してパネルディスカッションが行われ、奄美群島のブランド化、生物文化多様性と経済発展との両立、奄美群島の未来に向けての大学との連携などについて意見交換が行われました。

2日目は「未来の奄美群島を担う人財育成・教育」をテーマに4名の方からの講演と「奄美群島振興のための人財育成と教育」と題したパネルディスカッションが行われ、離島教育や少人数教育のメリット・デメリット、群島内南北500キロの高校・12市町村・大学が繋がったプラットフォーム構想などについて意見を交わしました。パネリストには鹿児島県立大島高校の現役高校生にも登壇していただきました。

両日とも、講演、パネルディスカッションの内容について会場やオンラインから多様な質問や感想が寄せられました。

大学HP記事

（５）サーキュラーエコノミー実証事業～食品残渣の堆肥化・飼料化実証事業のための５者連携の開始～

本学が推進するサーキュラーエコノミー実証事業に関連して、11月6日にSHIROYAMA HOTEL kagoshimaにおいて、本学、SHIROYAMA HOTEL kagoshima、株式会社グリーナー、山元酒造株式会社及びサーキュラーパーク九州株式会社の５者が連携し、食品残渣の堆肥化・飼料化実証事業の開始に向けた確認書を締結しました。

本事業において、本学は学内や関係機関に所属する研究者とのコーディネートや、製造された堆肥（飼料）の成分を科学的に評価することにより高品質な堆肥（飼料）の製造・利用につなげる役割を担います。

●確認書の名称
食品残渣の堆肥化・飼料化実証事業の実施に関する確認書

●締結日
令和６年１１月６日（水）

●本事業における本学の役割
① 学内・関係機関に所属する研究者とのコーディネート
② 製造された堆肥および飼料の評価に関する学術的支援

●事業期間
令和６年１１月６日　～　令和８年３月３１日
（以降、自動更新）

大学HP記事

（６）「鹿児島県と鹿児島大学との就職支援に関する協定」を締結

3月24日、本学と鹿児島県は、相互に連携・協力に努め、鹿児島県における就職に関する情報等の提供など学生の就職活動を支援することにより、鹿児島県内企業等への就職を促進することを目的として、協定を締結しました。

鹿児島県庁で行われた協定締結式では、協定書へ署名後、各機関代表者より挨拶があり、本学佐野 輝 学長からは「今回の協定締結を機に、鹿児島大学が地域社会の発展と活性化に貢献し、地域が誇りとする大学を目指して、今後とも挑戦していく」との決意がありました。

本協定に基づき、両者は地域経済を支える人材の育成・確保に向けた取組を推進していくこととしております。

●協定名称
鹿児島県と鹿児島大学との就職支援に関する協定

●協定締結日
令和７年３月２４日

●連携・協力事項
・学生に対する県内の企業情報、
各種イベント等の周知に関すること
・学内で行う合同企業説明会等の開催に関すること
・保証人向けの就職セミナーの開催に関すること
・学生の就職に係る情報提供及び実績把握に関すること
・就職活動に支援を必要とする学生に対するキャリアサポートに関すること
・その他、学生の県内企業への就職促進に関すること

●協定期間
2025年３月24日～2026年３月31日（以降、自動更新）

大学HP記事

３．教育・学生関係

（１）本学修了生がUNIVAS AWARDS2023-24 優秀賞を受賞

令和6年3月に大学院理工学研究科を修了した茅野 智裕さん（現：株式会社京セラ）がUNIVAS AWARDS 2023-24のマン・オブ・ザ・イヤーに選出され、優秀賞を受賞しました。♂ UNIVAS AWARDS 2023-24は、一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が学生アスリートの中から、競技の成績・学業の充実や安全安心・大学スポーツの盛り上げ等に著しい成果を上げた人や団体を選出して表彰するものです。昨年度３月まで陸上競技部に所属していた茅野さんは、文武両道を実践し他の模範となる運動部学生として評価され、全国の中でも非常に優秀な成績であった7名に選ばれました。♂ 4月17日、UNIVAS AWARDS 2023-24 優秀賞授与式を京セラ鹿児島国分工場本館で開催しました。♂♂ 茅野さん率いる本学陸上競技部は、2023年5月28日に福岡県で行われた全日本大学駅伝九州地区選考会で優勝し、11月5日に開催された全日本大学駅伝に３９大会ぶりに出場しました。このことは多くのメディア（テレビ、新聞（全国紙及び地元紙））で取り上げられ、その活躍ぶりが社会的にも高く評価されました。

大学HP記事

（2）陸上競技部が学長へ全日本大学駅伝対校選手権大会出場を報告

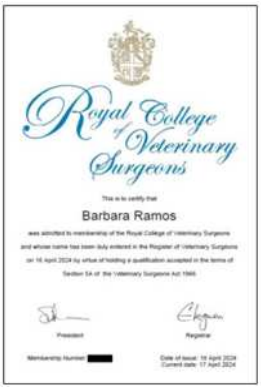
6月19日、本学陸上競技部（顧問：塗木淳夫准教授）は、学長へ秩父宮賜杯第56回全日本大学駅伝対校選手権大会への出場決定を報告しました。これは、6月2日に福岡県で行われた九州地区選考会において本学が1位となり、全国大会に2年連続、10回目の本大会出場を決めたことから行われたものです。

学生らは、賞状やトロフィーとともに優勝を報告し、選考会での勝因や日頃の練習状況、選手権に向けた意気込みなどを語り、陸上競技部で作成したダイジェスト動画で大会当日の様子も披露しました。佐野学長からは、「昨年に引き続き大会出場を決めたことは素晴らしい。今年もぜひ本大会でも活躍してほしい」と、祝福と激励がありました。

大学HP記事

（3）共同獣医学部共同獣医学科卒業生のバルバラ ラモス獣医師が英国の獣医師免許を取得

共同獣医学部共同獣医学科は2019年6月からEAEVE（欧州獣医学教育機関協会）の獣医学教育国際認証を取得していますが、認証取得以降に卒業した学生は、英国における獣医師資格認定試験を受験せずに獣医師免許を取得することが可能となっています。♂　この制度を利用して2023年に英国の獣医師免許を取得した木下晃輔獣医師（3期生）に続き、ブラジルからの国費留学生として共同獣医学部共同獣医学科に在籍し2024年3月に卒業したバルバラ・ラモス獣医師（7期生）が2024年4月16日付で英国の獣医師免許を取得しました。♂　ラモス獣医師は在学中に大学間協定校のフランス・VetAgro Sup（Lyon獣医大学）での臨床実習に参加するなど豊富な海外経験を有し、現在は英国の民間動物病院に勤務しています。



●EAEVE（欧州獣医学教育機関協会）の獣医学教育国際認証を取得

●VetAgro Sup（Lyon獣医大学）での臨床実習

大学HP記事

（4）かごしま未来創造Lab第１期をスタートしました！

日本科学技術振興機構（JST）の鹿児島大学版の次世代科学技術チャレンジプログラム（STELLAプログラム）として，かごしま未来創造Lab第１期をスタートしました。

郡元キャンパスを拠点とする鹿児島Labでは，8月31日に開講式，講座「プログラミングでドローンを制御せよ」を実施しました。県内の小学校5～6年生及び中学校1～3年生17名が，令和6年8月から令和7年3月まで，毎月1回程度のプログラムを受講することになります。

また，国際島嶼教育研究センター奄美分室を拠点とする奄美Labでは，10月5日から第1期をスタートする予定です。

●かごしま未来創造LabのHP

●日本科学技術振興機構
次世代人材育成事業

大学HP記事

（5）理工系進路を目指す中高生のためのワークショップを開催

10月20日に鹿児島大学学習交流プラザにて、「理工系進路を目指す中高生のためのワークショップ」を開催しました。本ワークショップは、昨年度開催しました「理工系進路を目指す女子中高生のためのワークショップ」に引き続き、NPO法人女子中高生理工系キャリアパスプロジェクト（GSTEM-CPP）と、国際ソロプチミストオンライン鹿児島の全面的な協力を得て、鹿児島大学が共催しました。

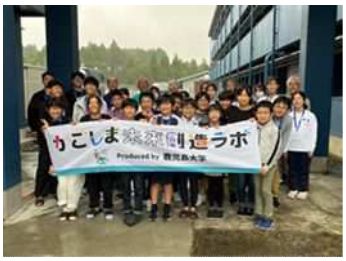
文部科学省の学校基本調査によると、鹿児島県の大学進学率は全国で下から2番目という状況が続いています。この地域格差は、大学から遠隔に位置する離島やへき地などの中高生が大学への進路を積極的に選択するために必要な情報が不足していたり、進路選択に対する保護者・教員のアンコンシャスバイアスが根強く存在したりすることが挙げられます。昨年は女子に限定していましたが、今回のワークショップでは、より広い視野での開催を目指し、参加者は鹿児島県内の中高生対象としました。

大学HP記事

（６）JST次世代人材育成事業「かごしま未来創造ラボ」奄美大島で小中学生と生物観察

JST次世代人材育成事業「かごしま未来創造ラボ」のプログラムの一環として，10月26日（土）～27日（日）に，鹿児島本土の小学校5・6年生7名，中学校１～3年生6名，奄美大島の小学校5年生1名，中学校1年生1名が参加して奄美大島での生物観察を実施しました。

大学HP記事



（７）JST次世代人材育成事業「かごしま未来創造ラボ」小中高校生とSKLV訪問

JST次世代人材育成事業「かごしま未来創造ラボ」のプログラムの一環として，11月16日（土）に，鹿児島本土の小学校5・6年生9名，中学校１～3年生5名，奄美大島の小学校5年生1名，中学校1年生2名が参加して南九州畜産獣医学拠点（SKLV）訪問を実施しました。また，鹿児島県内の公立SSH(スーパーサイエンスハイスクール)校との連携により，鹿児島県立甲南高等学校の1・2年生6名，国分高等学校の1年生2名が科学ボランティアとして参加しました。これに，教育学部・教育学研究科の学生5名がチューターとして指導補助に加わりました。

大学HP記事

（８）産官学連携による高度情報専門人材育成プログラムの開始に関する記者発表を実施

２月２７日，本学理工系総合研究棟2 階プレゼンテーションルームにおいて，令和７年度から開始する新たな高度情報専門人材育成プログラムの内容に関する記者発表を実施しました。

山口明伸大学院理工学研究科長及び重井教授が発表に臨み、令和７年度から、博士前期課程に情報系の３コース（数理情報コース、認知生体情報コース、協創情報コース）を有する新専攻（情報科学専攻）を設置し、情報系学生の定員を増加させると同時に、博士後期課程（総合理工学専攻）に新たに情報科学コースを設け、他分野や社会人リカレント教育も可能となる実践的教育カリキュラムの提供を開始すると発表しました。

本取組には、地域の自治体、企業団体、高等教育機関等にも参画いただいており、文部科学省「成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金」による10年間総額7億6000万円の支援も受けています。

大学HP記事

（９）令和６年度鹿児島大学進取の精神チャレンジプログラム『一般部門』『地方創生活動部門』成果発表会を開催

３月13日に進取の精神チャレンジプログラム「一般部門」「地方創生活動部門」成果発表会を開催しました。本プログラムは、学生自らが企画・運営・実施する様々な活動に対する支援事業として平成25年度から始まった企画で、平成28年度には、学生が県内自治体や企業などと連携した地域貢献活動を支援するため、新たに「地方創生活動部門」を創設しました。

令和６年度は、アフターコロナ２年目ということもあり、より本格的に課外活動に取り組める環境になりました。コロナ禍で落ち込んでいた経済が緩やかな回復を見せつつも、一方で、物価の上昇も伴う１年でした。限られた予算の中で最大限の効果を発揮できるようなアクティブで進取の精神にあふれる活動を期待してプログラム募集を行ったところ、一般部門６件、地方創生活動部門４件の合計１０件の応募がありました。各部門において審査を経て採択された６つのグループが大学や県内などのフィールドにおいて、課外活動や地域貢献活動に資する取組を積極的に展開しました。

成果発表会では６つのグループによるプレゼンテーションが行われ、取組みや今後の展望、採択の御礼を述べました。

大学HP記事

４．研究関係

（１）細胞内のHIVウイルス動態を高精度で可視化する新規感染系を確立～HIV感染の治癒を目指した研究の有用なツールになることが期待～

ヒトレトロウイルス学共同研究センター熊本大学キャンパスのOmnia Reda研究員、佐藤賢文教授、大学院生命科学研究部微生物学講座 門出和精助教らの研究グループは、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科の武内寛明教授、ヒトレトロウイルス学共同研究センター鹿児島大学キャンパスの前田賢次教授及び英国インペリアル大学等との共同研究により、タイマー蛍光タンパクという時間動態が観察可能な特殊なタンパクを搭載した組み換えウイルスを作製し、HIVが細胞に感染し侵入した後のウイルス動態を詳細に観察することを可能にする新規感染系を確立しました。さらにその新システムを用いて、ウイルスを感染させた細胞の詳細な解析を行ったところ、ウイルスが潜伏する２つのルートを区別することが可能となり、その２つでは潜伏のメカニズムが異なることを明らかにしました。さらに、HIV-Tockyシステムを用いて作製した感染細胞モデルは、潜伏を標的とする薬剤で処理をした際に、従来のモデルに比べてより鋭敏に薬剤効果を判定できることから、今後のHIV感染の治癒を目指した研究において有用なツールになる事が期待されます。

本研究結果は令和６年３月２０日（現地時間）に英科学誌「Communications Biology」に掲載されました。♂また、本研究は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）エイズ対策実用化研究事業「革新的核酸解析技術によるHIV潜伏感染機序の解明と克服のための研究」からの支援を受けて行われました。

熊本大学 Kumamoto University
国立大学法人 東京医科歯科大学 TOKYO MEDICAL AND DENTAL UNIVERSITY
国立大学法人 鹿児島大学 KAGOSHIMA UNIVERSITY

大学HP記事

（２）八代海海底断層群の一部で応力が集中し海水中ラドン濃度の高い場所を発見

鹿児島大学総合教育機構共通教育センター川端訓代准教授と大学院理工学研究科北村有迅助教は，台湾国立中央大学の馬國鳳教授や東京大学の角森史昭助教らとの共同研究により，八代海の海底活断層群において，一部で平成28年熊本地震以降地震活動が増え応力が集中している領域を発見しました。また，同領域の海底付近の海水中には断層由来と思われるラドンガスが濃集していることを発見しました。今回これらの異常が検出された領域では，平成28年熊本地震発生後に応力が集中し歪が蓄積されており，Sランク活断層である日奈久断層帯八代海区間の中でも特に注意すべき領域であることがわかりました。

本研究成果は，英科学雑誌「Scientific Reports」に2024年4月15日付で掲載されました。

本研究の結果は，今後の地震予知や地殻活動予測に大きな貢献が期待されます。

大学HP記事

（３）理工学研究科宮町特任教授のグループが発表した論文が日本火山学会論文賞を受賞

日本火山学会などが共同発行するEarth, Planets and Spaceと日本火山学会が発行する学会誌「火山」に発表された過去３年間の論文の中から、宮町特任教授のグループが2023年に発表した論文が2024年度日本火山学会論文賞に選ばれました。

日本国内の大学、研究機関から参加した総勢７０人による共同研究の成果です。

本論文では、姶良カルデラを東西に横断する全長195kmの測線で2017年、2018年に観測された制御震源の走時データを解析し、深さ15kmまでの地震波速度構造を詳細に明らかにしたことが評価されました。また、その詳細な速度構造から姶良カルデラと若尊カルデラに分けられること、現在のマグマ移動経路に重要な役割を担っている深さ6～11kmにある古い固結したマグマだまりと深さ15km付近にある現在活動しているマグマだまりを見出しました。

大学HP記事

（４）化学プログラム加藤准教授のゲンジボタルの発光パターンに関する研究がNHKシチズンラボにて取り上げられました

鹿児島大学理学部化学プログラムの加藤太一郎准教授らの研究グループは、ゲンジボタルの発光パターンに関する研究を行っています。今回その研究がNHKシチズンラボにて取り上げられ、日本中の一般の方々に協力いただきながら「ゲンジボタルの発光パターンの分布地図を作る」取り組みを始めることとなりました！この研究の成果は、ゲンジボタルの遺伝的多様性の保全活動に活かす計画です。

●NHKシチズンラボのwebサイト

大学HP記事

（５）「先端研究集成館事業」を創設～大学の特色・強みのある研究を支援～

本学は、学長のリーダーシップのもと、本学の特色・強みを活かし、研究IRを踏まえた研究を選抜・認定し、研究活動の高度化及び持続可能な発展・強化を図り、その成果を社会に還元することを目的とした卓越的な組織的研究プロジェクトである「先端研究拠点」と、それを目指した「先端研究プロジェクト」の集合体である「先端研究集成館事業」を令和６年２月に創設しました。

研究期間において総額1000万円以上の競争的研究費を獲得した研究シーズを基盤とする「先端研究プロジェクト」の第１回目の公募が行われ、独創的・先駆的な基礎研究やイノベーション創出に繋がる卓越した研究と認められた10の研究プロジェクトが、このほど「先端研究プロジェクト」に認定されました。

大学HP記事

（６）小山先生の「親子でスクラッチゲームプログラミング in 奄美パックマン風ゲームに挑戦!」を実施しました

理学部の小山佳一教授（専門：磁気物理学）が、7月20日の午後に、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室で、小学4～6年生とその保護者を対象にした「親子でスクラッチゲームプログラミング講座」を行いました。

理学部は、SDGs（持続可能な開発目標）の一つ、「質の高い教育をみんなに」達成のため、2022年から奄美群島地域の小中学生徒向けに、各種の講座を、国際島嶼教育研究センター、情報基盤統括センターと協力して開催しており、今回の授業もその一環で実施されました。

大学HP記事

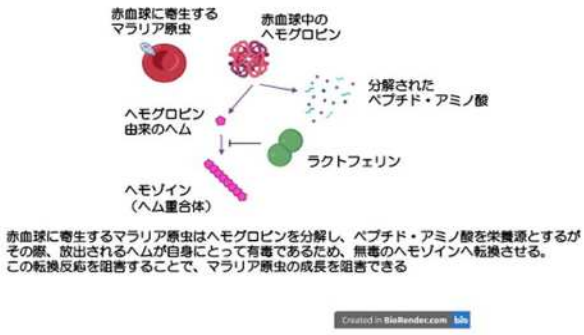
（7）新型コロナウイルス感染症治療薬開発に関する共同研究成果を「大学見本市2024～イノベーション・ジャパン」に出展・発表

先端科学研究推進センターの感染制御研究ユニット・感染制御研究部門は，東京理科大学薬学部の青木伸教授らと実施中の，新型コロナウイルス感染症治療薬開発に関する共同研究成果を，2024年8月22日と23日の2日間にわたり，東京ビッグサイトにて開催された「大学見本市2024～イノベーション・ジャパン（国立研究開発法人科学技術振興機構主催）」に出展・発表しました。

同見本市には全国の大学から5分野281件の研究成果に関する出展があり，本学からは当研究部門の成果である「抗新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）薬」が「健康・医療」分野で選ばれました。

大学HP記事

（8）ラクトフェリンを利用した新規マラリア薬剤開発



大学HP記事

農学部農学科食品化学研究室の宮田健准教授らの研究グループは、北里大学獣医学部、産総研との共同研究により、牛の母乳に含まれるラクトフェリンが、寄生虫であるマラリア原虫の栄養代謝を阻害することを明らかにしました。♂
マラリア原虫は動物の赤血球に寄生します。この際、栄養源として、ヘモグロビンを消化してアミノ酸やペプチドを利用しますが、同時に放出されるヘムがマラリア原虫にとって有害であることから、マラリア原虫は、それを重合化することで、自分にとって無毒なヘモゾインへ変換します。この重合過程をラクトフェリンが阻害することがわかりました。さらに、ラクトフェリンは重合化したヘモゾインも分解することで、積極的にヘムを生み出すことも分かりました。♂　今後さらに研究を進めることで、これまでにない抗マラリア薬剤の開発につながることが期待されます。この研究成果は、9月2日、Springer Natureの学術雑誌「Scientific Reports」に掲載されました。

（9）鹿児島の薬用植物から新型コロナウイルス感染症の治療薬シード化合物を発見！！

理工学研究科 濵田季之准教授らを中心とする研究グループは、本学の大学院理工学研究科、ヒトレトロウイルス学共同研究センター・トランスレーショナルメディシン分野、先端科学研究推進センター感染制御研究部門などとの連携研究により、鹿児島県産のシソ科薬用植物ホーリーバジルに含まれる「sulfoquinovosyl diacylglycerol（SQDG）」という化合物が、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2)の増殖を抑制することを発見しました。本研究成果は、Springer Nature社が発行する生薬に関する専門誌「Journal of Natural Medicines」誌に掲載されています。

本論文の第一著者である小瀬 日奈子さん（理工学研究科修士課程1年生）は、本研究成果を中心とした学会発表2件で「優秀発表賞」を受賞しており、本TOPICSでも紹介されました。

ホーリーバジル(*Ocimum tenuiflorum* L.)

大学HP記事

（10）2025年日本国際博覧会（大阪万博）実証試験・出展

2025年日本国際博覧会（大阪万博）では、会場全体を未来社会のショーケースとし、少し先の未来を見て、さわって、体験する様々な企画があります。その中で「スマートモビリティ万博」「デジタル万博」「グリーン万博」などの企画展示があり、ムーンショット型研究開発事業の選ばれたプロジェクトが、「グリーン万博」において、開発品の実証と幅広く公開展示をします。

本学理工学研究科の金子芳郎准教授は、高分子の分子構造制御に関する研究を専門としており、さらなる性能の向上を目指した分離ナノ膜の開発担当として、九州大学 藤川茂紀教授を中心とし、2020年より開始された研究プロジェクト「ムーンショット型研究開発事業『”ビヨンド・ゼロ”社会実現に向けたCO2循環システムの研究開発』」に参画しております。

本プロジェクトでは、圧倒的に高いCO2透過量を持つシリコーンをベースとした分離ナノ膜によって、これまで不可能と思われてきた膜分離による大気中からのCO2回収の実現を目指しています。さらに、CO2の回収から炭素燃料製造までを連続・一貫して行う「Direct Air Capture and Utilization（DAC-U）システム」の創出を目指しています。

本プロジェクトは、「グリーン万博」において、この実証・展示に選ばれ、万博会期中、会場内にて実証および展示する運びとなりました。

大学HP記事

（11）高病原性鳥インフルエンザの新たな高感度検出法の確立とその活用に向けた取り組みを開始-鳥取大学と(株)AdvanSentinelとの連携

この度、本学は鳥取大学および(株)AdvanSentinelと共同研究契約を締結し、環境水を対象とする高病原性鳥インフルエンザウイルスの新規高感度検出法の確立と、その妥当性および有用性の検証を目的とするプロジェクトを始動しました。

近年、高病原性鳥インフルエンザウイルスが世界各地で検出されており、日本においても希少鳥種を含む野生動物や家禽の感染が相次いで報告されています。本学では2012年より、野鳥におけるウイルスの浸潤状況を迅速かつ効率的に把握することを目的として、渡り鳥の渡来地で採取した環境水を検体とする鳥インフルエンザサーベイランスを実施してきました。一般的な検査対象とされる野鳥の糞便や死亡個体に比べて、環境水は安定的な採材と検査が可能であり、ウイルス検出効率の点でも優れていることから、鳥インフルエンザサーベイランス検体としてさらなる活用が期待されています。

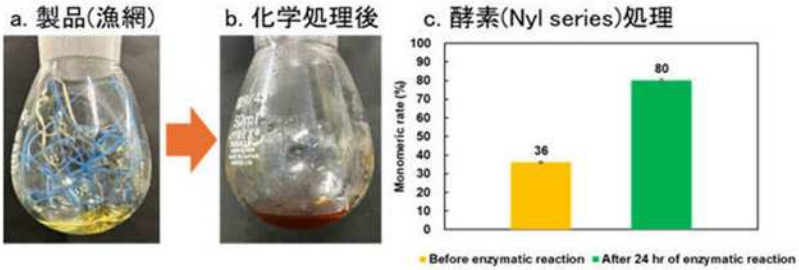
本共同研究では、AdvanSentinelが保有する高効率核酸濃縮技術（QuickConc™）と高効率核酸抽出技術（COPMAN®）を組み合わせ、環境水に含まれる高病原性鳥インフルエンザウイルスの新たな高感度検出法の確立とその評価に取り組みます。また、環境水からの鳥インフルエンザウイルス検出に実績のある鳥取大学との連携を通じて、技術の妥当性および有用性の検証を進めることで、環境水を検体とする鳥インフルエンザサーベイランスの普及促進を図ります。

大学HP記事

（12）酵素を利用してナイロンをモノマーへと完全分解することに成功！
～これまで廃棄されていたナイロンをケミカルリサイクルする基盤技術となり得る成果～

プラスチックの一種であるナイロンは、耐熱性・耐薬品性に優れており、衣類や自動車部品など我々の身の回りの様々な素材・製品に利用されています。しかし難分解性で生分解を受けないため使用後の環境負荷問題が顕在化しており、また効果的なリサイクル方法も確立されていません。

今回、理工学研究科の白石雄樹氏(博士後期課程学生)と加藤太一郎准教授(化学プログラム)を中心とする研究グループは、兵庫県立大学の根来誠司名誉教授と共同で、難分解性のナイロンを酵素(Nyl series)を利用して原料であるモノマーへと完全分解する方法を開発しました。



大学HP記事

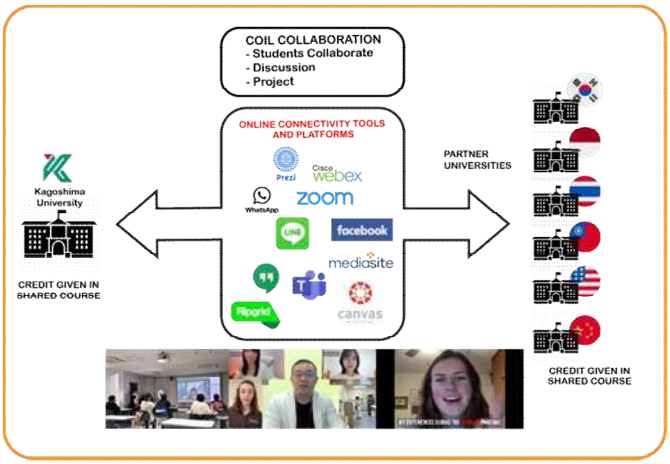
（13）大学の特色・強みのある卓越研究を紹介します～「先端研究集成館事業」特設サイトの公開～

本学は、令和６年２月、卓越的な組織的研究プロジェクトである「先端研究拠点」と、それを目指す「先端研究プロジェクト」の集合体である「先端研究集成館事業」を創設しました。これは、学長のリーダーシップのもと、本学の特色・強みを活かし、研究IRを踏まえた研究を選抜・認定するもので、研究活動の高度化および持続可能な発展・強化を図り、その成果を社会に還元することを目的としています。♂　現在、独創的・先駆的でイノベーション創出に繋がる卓越研究と認められた１０の研究プロジェクトが、「先端研究プロジェクト」に認定されています。♂　このほど、先端研究集成館事業の特設サイトを公開しました。このサイトにて、先端研究プロジェクトを順次紹介していきますので是非ご覧ください。

大学HP記事

5．国際関係

（１）大学の世界展開力強化事業「COIL型教育を活用した米国との大学間交流形成支援」事後評価において本学プログラム『Ａ』評価



2018-2022年度(５年間)に取り組んだ本学の『米国から鹿児島、そしてアジアへ：多極化時代の三極連携プログラム』は、事後評価を受けて、Ａ（事業計画通りの成果を上げており、目的は十分に達成された）の評価をいただきました。

＊事後評価結果
（独立行政法人日本学術振興会のWEBページ）

大学HP記事

（２）清華大学サマープログラム受入れを実施

2024年7月11日～20日の間、中国・北京市に所在する清華大学の学生15名および引率教員3名が鹿児島を訪問しました。

鹿児島大学で行われた学生交流では、清華大学、鹿児島大学、志學館大学の代表者から、大学紹介や研究発表がなされた後、各グループに分かれて活発なディスカッションが行われ、日本と中国との文化の違いについて理解を深めました。♂　フィールドワークでは、宮崎駿監督の「もののけ姫」のイメージの源泉となった屋久島を訪れ、雄大な自然に直接触れ、アニメの世界観を体感しました。また、鑑真記念館、ふるさと維新館、鹿児島県歴史･美術センター黎明館、仙厳園等を訪れ、鹿児島の歴史について学びを深めました。

さらに、鹿児島県庁、鹿児島商工会議所、南さつま市役所、加世田高校を親善訪問し、同校では高校生との交流プログラムも実施されました。

大学HP記事

（３）インドネシア アンダラス大学長一行が学長を表敬訪問、大学間学術交流協定を更新

10月15日、インドネシア　アンダラス大学Efa Yonnedi学長一行が本学を来訪し、佐野 輝学長を表敬訪問するとともに、大学間学術交流協定更新のための調印式を行いました。
アンダラス大学は、1956年にインドネシア西スマトラ州の州都パダンに設立された国立大学であり、本学とは2003年に大学間学術交流協定を締結して以来、農学部を中心に学生交流や共同研究で協力してきました。
今回の協定更新を機に学生交流や共同研究のより一層の活性化が期待されます。

大学HP記事

（４）台湾大学群12大学（UAAT）代表団訪問

12月20日、台湾大学群12大学（UAAT*）より国立台湾師範大学、国立政治大学、国立中興大学（大学間国際学術交流協定校）一行が郡山 千早副学長（国際担当）を表敬訪問されました。
今回の訪問は、UAATと本学の更なる連携協力促進のため、国立台湾師範大学よりKwun-Min Chen副学長、Ying-Shao Hsu副学長、Yi-De Liu副学長をはじめ11名、国立政治大学よりJung-Chao Ban副学長補佐を含む２名、国立中興大学よりShun-Yo Liao教授をはじめ３名が来日し、実現したものです。

大学HP記事

（５）鹿児島大学留学生会（KUFSA）インターナショナルナイト2024を開催

12月21日、鹿児島大学留学生会（KUFSA: Kagoshima University Foreign Students Association）主催による、地域住民の皆さまと留学生との交流事業の一つである「インターナショナルナイト2024」が開催されました。♂ インターナショナルナイトは、留学生が日頃お世話になっている方々に感謝の意を込めて、各国の音楽やダンス、民族衣装のファッションショー等を通して、母国の文化を紹介する毎年恒例のイベントで、今回はコロナ禍を経て５年ぶりに開催され、教職員・日本人学生を含む地域の方々約200名が参加しました。

大学HP記事

（6）中国 清華大学と大学間学術交流協定を締結

12月17日、佐野学長以下鹿児島大学一行が、中国・北京市の清華大学にて行われた協定締結式に臨み、清華大学との大学間学術交流協定を締結しました。

本学と清華大学との交流は、2013年に鹿児島県と清華大学との間で締結された「包括交流に関する覚書」の下、継続して行われてきました。コロナ禍による一時の中断を見たものの、2023年12月、鹿児島県の覚書の更新を機に、大学間協定締結が提案され、今回の締結式に至りました。これに先立ち、2024年7月には、鹿児島大学稲盛アカデミーと清華大学日本研究センターが合意覚書を締結するとともに、本学において、清華大学の学生15名のサマープログラム受入を行うなど、既に本格的な交流開始に向けた動きが進んでいます。

締結式では、清華大学の邱勇書記から鹿児島大学一行に歓迎の言葉が述べられ、佐野学長が、今後、学生交流や共同研究を中心とした両大学間の交流を発展させたいと応えました。和やかな歓談が行われた後、佐野学長と邱書記が協定書に署名し、協定が締結されました。

今後、大学間学術交流協定の下で、両大学間の学生や教職員の交流が一層盛んになることが期待されます。

大学HP記事

（7）ワシントン大学と学術交流協定を締結

11月21日、鹿児島大学は、米国・ワシントン大学と学術交流協定を締結しました。

ワシントン大学は、アメリカ合衆国ワシントン州シアトルに本部を置く米国西海岸で最も古くからある名門大学で2024年度 U.S. News & World Report「世界大学ランキング」では7位の評価を受けています。また、潤沢な運用資金を備え全米でも優れた研究大学の一つです。

本学ではこの協定締結を契機に、今後は法文学部、理工学研究科、医歯学総合研究科を中心として、研究者交流や学生交流を推進するとともに、水産学や防災分野においても、両大学で協力して、鹿児島県の地域的特性を活かした共同プロジェクトを構築していくことを目指します。

今回の協定は、かねてよりワシントン大学と連携関係にあった重富商事株式会社の代表取締役社長 岩崎 浩一郎様より、ワシントン大学と本学との学術交流に対するご協力の申し出をいただき、締結に至ったものです。

これまでも、同社からは2023年2月10日にみやぎんCSR型私募債「With」の活用を通じて鹿児島大学病院基金へのご寄附をいただいております。「With」では、私募債発行に際し、地域への貢献のため金銭や物品の寄附が行われます。このほか、従前より、岩崎様からは研究資金へのご寄附の仲介・協力など鹿児島大学の発展のため、様々な支援をいただいております。

大学HP記事

（８）鹿児島大学農学部とJICA九州センターがJICA海外協力隊の連携派遣に係る覚書を締結

３月10日、本学農学部とJICA（国際協力機構）九州センターは、マダガスカル国でのコメの生産量増大を共同で進めるため、JICA海外協力隊の連携派遣に係る覚書を締結しました。署名式は、本学郡元キャンパスで開催され、農学部から寺岡行雄学部長、JICA九州センターから後藤光所長が出席しました。

マダガスカルでは、主食であるコメの生産が人口の増加に追いついておらず、コメの生産性を上げることが課題となっています。この覚書に基づき、JICA海外協力隊として本学の国際食料資源学特別コースを含む学生ら計13名（長期派遣３名、短期派遣10名）が今後５年間にわたりマダガスカルに派遣され、コメの生産量増大に向けた協力を行います。具体的には、現地で国立農村開発応用研究センター（FOFIFA）に所属し、FOFIFA研究者のスキルアップ、コメ収量向上に貢献する新たな稲作技術の導入、農家への支援などに従事します。第１陣として、2025年８月から１名が２年間派遣される予定です。

大学HP記事

６．医療・病院関係

（１）鹿児島大学病院アメニティ施設「さくらぴあ」竣工式を挙行

鹿児島大学病院では、患者さんをはじめとした病院利用者へのサービス向上、大学関係者の福利厚生の充実、地域連携や教育研究の推進等を目的に、アメニティ施設の整備を進めて参りました。

このたび、令和5年4月より着工したアメニティ施設（施設名称「さくらぴあ」）が令和6年2月に竣工、4月1日にオープンすることを受け、3月27日に竣工式を挙行しました。

「人と人、病院と市民のつながりを生み出す施設」のコンセプトの下、初めて訪れた人にも分かりやすいエントランスを中心とした平面計画で設計されており、施設名称「さくらぴあ」の桜をモチーフとした明るい色彩を基調とした建物となっています。

大学HP記事

（２）外来診療棟・病棟（Ａ棟）が開院

鹿児島大学病院では、「21世紀に輝くヒューマントータルケア病院」を目指し、平成17年度から病院再開発計画に着手してまいりました。
このたび、令和2年3月より着工した外来診療棟・病棟（Ａ棟）が令和6年1月に竣工、9月18日に開院いたしました。
開院前日の9月17日には、記者発表を開催し、再開発計画の概要説明や質疑応答、施設見学等を行いました。
今後は、駐車場等の外構整備を行い、令和10年度に再開発整備全体が完了する予定です。

大学HP記事

（３）外来診療棟・病棟（Ａ棟）開院記念フェアを開催

鹿児島大学病院は、12月１日に、外来診療棟・病棟（A棟）開院記念フェアを開催しました。
本フェアは、外来診療棟・病棟（A棟）が令和６年９月18日に開院したことを記念し、鹿児島大学病院で働く医療従事者にスポットを当て、職業体験、進路相談、見学ツアー等を行うことで、医療職に対する興味・関心を高めていただくことを目的に実施されました。
当日は、対象となる中学生、高校生、大学生、短期大学生、専門学校生を中心に、約300名の方に来場いただきました。
各職種のブースでは、妊婦体験や普段触れることのない医療機器の操作体験、職員による進路相談などの様々な企画が行われ、職員と来場者が笑顔で交流を楽しむ姿が印象的でした。
また、各ブースの活動と並行して、ステージでは、鹿児島大学医歯学ダンス部によるダンスパフォーマンスや医学部保健学科教員による講演会、DMAT※１・DPAT※2活動報告会などが行われ、多くの方に観覧いただきました。

大学HP記事

※１　DMAT（災害派遣医療チーム：Disaster Medical Assistance Team）
大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48時間以内）から活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チーム

※２　DPAT（災害派遣精神医療チーム：Disaster Psychiatric Assistance Team）
大規模災害後、被災地域に入り、精神科医療及び精神保健活動の支援を行う専門的なチーム

7. その他

（１）奄美群島の生態系保護啓発ポスターが「第49回鹿児島広告協会賞」で協会奨励賞を受賞

4月23日にホテルレクストン鹿児島で開催された「第49回鹿児島広告協会賞」において、鹿児島大学発起にて作成した奄美群島の生態系保護啓発ポスターが「協会奨励賞」を受賞しました。

同賞は、鹿児島の有志企業・広告会社による「鹿児島広告協会」が毎年、その年につくられた広告物・販促物で優れたものを表彰するものです。

本ポスターは、奄美群島における社会との一つのつながりとして、奄美群島を研究フィールドとしている異なった専門性の本学研究者が結集して、奄美群島の生態系保護の啓発ポスターを作成したものです。

（表彰式の様子）

（会場に展示された入賞作品）

大学HP記事

（２）令和６年度 鹿児島大学ダイバーシティトップセミナーを開催

令和6年9月4日、山村康子氏（国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）プログラム主管）を講師に迎え、令和6年度鹿児島大学ダイバーシティトップセミナーを対面とオンラインの同時開催によるハイブリッドにより開催しました。本セミナーは、文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業（先端型）／令和2年度選定を受け、「ダイバーシティ推進の動向と鹿児島大学への期待」を演題として行われたもので、佐野輝学長をはじめ役員、教職員、学外関係者等139名が参加しました。

大学HP記事

（3）「リスクへの自覚を促す教員研修教材シリーズ」の無償提供を開始

本学大学院教育学研究科髙瀬研究室（助教：髙瀬和也）は，国立大学法人静岡大学教育学部塩田研究室（准教授：塩田真吾），鹿児島県教育委員会と共同で，「飲酒運転」「職員間ハラスメント」を題材としたリスクへの自覚を促す教員研修教材を開発しました。研修などで利用できる教材一式を提供開始します。

鹿児島県教育委員会では，これまでも各種研修や学校での服務指導を通じて，不祥事の根絶に取り組んできました。しかしながら，依然として「自分事」として捉える意識の低さや，一部の不祥事の原因として自己の感覚や考えに対する無批判なこだわりが指摘されています。このため，相手意識の醸成や意識の更新・変容を促進する取組が必要であると考えていました。

このような状況を踏まえて三者は，教員をとりまく不祥事に関するリスクを自分事として考えていくための，「リスクへの自覚を促す教員研修教材シリーズ」の構築に着手しました。当教材は鹿児島大学と静岡大学が開発し，鹿児島県教育委員会が監修しています。

今回は，シリーズ第1弾「導入＆飲酒運転のリスクver.」と，第2弾「職員間ハラスメントのリスクver.」との2点を公開しました。

教員のリスクに対する自覚意識を育むべく，すべての学校の先生方や教育関係者の皆様に，広くご活用いただけますと幸いです。

★ワークシート教材は
こちら

大学HP記事

（4）鹿児島中央高等学校と課題研究等協力についての協定を締結

3月17日、法文学部と鹿児島中央高等学校は、高大接続及び課題研究等の充実を図ることを目的として連携協定を締結しました。

同日、鹿児島中央高等学校にて協定締結式が行われ、藤内哲也法文学部長と野村義文鹿児島中央高等学校校長により、協定書が交わされました。法文学部ではこれまで鹿児島中央高等学校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業や大学研究室訪問を受け入れてきましたが、この協定により、高校生が大学の研究環境に触れる機会が増え、将来の進路選択に役立つことが一層期待されます。

大学HP記事

8．広報関係（広報全般・入試広報等）

（1）広報誌「鹿大ジャーナル」のご案内

「鹿大ジャーナル」は、鹿児島大学広報センターが発行する広報誌です。
特色ある本学の教育・研究・社会貢献活動や学生の現状などの情報を広くわかりやすく一般に紹介することを目的とし、年に3回発行しています。
幅広い大学の取組、学生の活躍や卒業生からのメッセージなど、様々な情報を発信していますので、是非ご覧ください。
（https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/kadaijournal.html）

（2）【広告】 新発売！「さっつんサブレ」のご案内

「手土産に持っていけるような鹿児島大学のお菓子があれば...。」そんな声にお応えし、オリジナル商品「さっつんサブレ」が遂に誕生しました！
　商品は本学インフォメーションセンター・風月堂山形屋店で取り扱いのほか、風月堂各店舗などでの一般向けの販売も予定しております。
お見かけの際はぜひお買い求めください。

（3）受験生向けウェブサイト「どこでもKADAIドア」

鹿児島大学は、受験生の皆さんに対する効果的な情報発信を目的とし、2021年8月に受験生向けウェブサイト「どこでもKADAIドア」を開設しました。
受験生のための「どこでもKADAIドア」
https://www.kagoshima-u.ac.jp/exam/kadaidoor/

鹿児島大学は、県内離島地域からの進学促進のための様々な取組を行っているところです。このような取組に関する情報の充実を求める声があったことから、上記「どこでもKADAIドア」の中の１コーナーとして、特に県内離島地域受験生への情報提供を目的とする「島からKADAIへ」というページを2022年3月に設けました。
「島からKADAIへ」
https://www.kagoshima-u.ac.jp/exam/kadaidoor/island/

9. 基金・決算関係

（１）鹿大「進取の精神」支援基金について

鹿大「進取の精神」支援基金は、2015（平成27）年4月に創設し、大学全体で各種の教育・研究活動に幅広く活用させていただく一般資金と、修学支援事業基金や学部等支援基金など使途を特定した特定資金とにより構成されており、支援目的を選択してご寄附いただけます。

2024（令和６）年度末までの累計寄附額は6億9,759万円で令和６年度は608件で2,847万円のご寄附いただきました。

鹿大「進取の精神」支援基金は、多くの皆様にご支援いただき、学生・研究等への支援に活用させていただいています。

鹿大「進取の精神」支援基金について詳しくはこちら→

税制上の優遇措置や入金確認、寄附金領収書等に関するお問い合わせ先はこちら→